

# 国史跡 竹田城跡

兵庫県朝来市和田山町  
但馬乃国「虎臥城」



# 発刊にあたって

## ようこそ和田山町へ

和田山町の誇る「竹田城跡」を中心に竹田を散策される方々に、ぜひこの本を参考にしたいいただきながら「国史跡 竹田城跡（別名・虎臥城）」・「寺町通り」・「山桜の立並木」・「山城の郷」などをゆっくり散策してくださいますようご案内申し上げます。

この「竹田」の町は、中世の時代から交通の要衝の位置にあり、但馬の重要な戦略基地の城下町（市場町）として栄え、明治・大正・昭和の初期までは、朝来郡一帯の中心地として大いに栄えてきましたが、鉄道の開通により現在の姿に至っています。

大分県竹田市には「荒城の月」で有名な岡城跡がありますが、高い処から見た型が牛の伏せた型に似ているところから別名「臥牛城」と呼ばれています。また、和歌山城も「虎伏城」又は「伏虎城」と呼ばれ、和田山町の竹田城「虎臥城」とよく似た呼び名となっています。

それでは、ロマンの戦国時代へタイムスリップの旅へ出発です。

まず一步を踏み出しましょう。

平成十二年四月

和田山町観光協会

# 目次

- 一 日本一の山城（遺構）
  - 一 織田信長と穴太衆
  - 二 穴太積みの起源
  - 三 栗田純司氏のことば
- 二 国の史跡指定
- 三 昭和の石垣修復
- 四 竹田城の歴史
  - 一 中世の竹田城
  - 二 近世の新しい竹田城
- 五 悲運の城主「赤松廣秀」
- 六 赤松廣秀と藤原惺窩、安永
- 七 竹田城の崩壊
- 八 お城まつり
- 九 竹田城のみどころ
  - 一 竹田城の石垣
- 十 竹田城を歩く
  - 一 大手口
  - 二 大手口から観音寺山の出丸
  - 三 北千登から本丸と平殿
  - 四 本丸と天守台
  - 五 南二の丸から南子役
  - 六 花屋敷（花殿）・井戸跡

十一 遺構群

壱堀群

石取り場

太田垣氏居館推定地

十二 城跡からの眺望

十三 登山道

十四 城下町の移り変わり

十五 竹田城に関係する寺院・神社など

十六 いにしえの郷

十七 昭和の竹田の町づくり

十八 平成の幻の竹田城

十九 ふるさと散策

二十 地場産業と特産品・お土産

二十一 観光コース

二十二 竹田城関係略年表

あとがき





明治六年作成の竹田藩地図（竹田史料館蔵）





法宝寺制札 (和歌山県)



竹田城付近にある道標  
(右：たきのやみち／左：はりまみち)



大踏山から移された千原寺跡碑 (込木寺境内)



高松市街地の地形図

## 一 日本一の山城（遺構）

### 一 織田信長と穴太衆

元龜二年（一五七二）の比叡山の焼き討ちで、信長は穴太衆の存在を知り、天正四年（一五七六）正月に着工した安土城の築城に、初めて穴太衆を動員した事になっています。

安土城に起用されて以来、石垣積み技術集団・穴太衆の名は一躍天下に知られることとなり、信長、秀吉、家康へと穴太衆の起用が引き継がれ、竹田城をはじめ姫路城、大坂城、伏見城など全国の数多くの城でこの技法が採用されています。

また、山頂に築かれた山城は、石垣城、盛扶山城、安土城、津和野城など国内に数多くありますが、城の周囲を完全な石垣で構築され、今なお築城当時の姿をそのまま残している竹田城跡は、全国的にも大変貴重な城跡遺構となっています。

### 二 穴太衆の起源

穴太衆の起源は、穴、阿那（安羅）からすぐに連想され、大津からの渡来人といわれており、比叡山系と琵琶湖に挟まれた大津市北郊地帯に、六世紀ころから七世紀初頭にかけて渡来人が築造したと推測される「野ヅラ石の乱積み」という構築法による二手を超える数の古墳群があります。

穴太衆は、これら横穴式古墳の石室づくりに習熟していた渡来人の子孫として、長い間高度な石積み技法を温存していたと思われます。

### 三 栗田純司氏のことば

竹田城跡の石垣を修復（昭和の修復）された穴太衆の末裔の栗田純司氏（滋賀県大津市坂本、穴太流十四代当主）の話によれば、「全国の山城の中で、このように完全な形で保存されている総石垣の竹田城跡は「わが国でも屈指の山城」の遺構である」。

また、今日まで赤松氏により築城されたと言われているが、このような大規模な城郭の普請ともなれば、二万二千石の小大名の事業としては荷が重く、おそらく天下人の豊臣家から戦略的意図により、財政面で大きな支援があったのではないか。」と言われています。

## 二 国の史跡指定

竹田城跡は、JR播但線竹田駅（兵庫県朝来市和田山町竹田）の西側に聳え立つ古城山（三三三メートル）の山頂に築かれた近世初期の山城遺構です。



竹田城と雲井谷



この城跡は、全国的にも屈指の山城遺構として、昭和十八年九月八日、「史跡名勝天然記念物保存法」に基づいて国の史跡に指定されました。その史跡指定の理由に次の記録が残されています。

「円山川（朝米川）の左岸なる山上にあり、一に虎臥城と称せられ、嘉吉年間、山名持豊（宗全）の築城にかかるものと云う。後、その臣太田垣氏四世之に居り、天正八年（一五八〇）桑山氏の居城となり、同十三年（一五八五）、赤松広通の拠る処となりしが慶長五年（一六〇〇）十月、城主島取に出陣中自刃せるによりて廢城となれり。

城高は、三五メートルの山頂を削平して本丸を築き、これを中心として東西約五十間、南北二百五十間の部分に階段状に石垣をめぐらし、その中に城櫓、城門を配し、あたかも飛鳥の双翼をひらげたるが如く、北端に近く北千畳敷あり、南端に接して南千畳敷ありて円山川溪谷一帯を制圧するの位置にあり、石垣を存する山城として稀有のものなり。

朝米郡竹田町竹田字白城山一六九番地」と記す。

指定当時の面積一町八反五畝十九歩

以上



南千畳からの天守台



竹田城之城下町・西側

## 三 昭和の石垣修復

和山町は、国庫の補助を受け、昭和四十六年度から昭和五十五年度の間に、六、四〇〇万円の事業費をもって石垣の崩壊箇所の大修繕を行い、築城当時の姿に復元しています。

この修理にあたっては、文化庁神野浩調査官、国上館大学田代英夫教授らの指導を受け、施工は国の指定業者、穴太流石垣師栗田万喜三氏（遊覧大津市坂本、穴太流十三代当主）を指名し施工しています。

なお、現存の竹田城跡は文禄・慶長のころ補強改修し南三疊などを拡張されているという説については、石垣の修復を担当された栗田万喜三氏の説や、地元に残された史料（相田上道氏日記）などとも符合しているところがあります。

なお、この事については、昭和四十五年修復に立ち会われた文化庁の調査官と栗田万喜三氏並びに町関係者との間で、南下段と南門、花屋敷と北下段の指め手は当時未完成であったことについても確認されています。

## 四 竹田城の歴史

昭和三十年代頃までは山名宗全時代の遺構であるといわれてきましたが、最近、城郭研究家や歴史家などの調査研究の結果、現存する石垣は、山名氏の築城したものではなく、天正初期から晩城に至るまでの間に、山名氏時代の城址（上段）に、近世式の城郭を構築した遺構であるといわれるようになってきました。

### 一 中世の竹田城

#### 山名持豊（宗全）による城づくり

竹田城の歴史は、当時但馬守護であった山名持豊（宗全）が永享三年（一四二一）、播州の赤松氏や丹波守護の細川氏に對抗するため、播磨・丹後・但馬の交通の要衝である竹田の地に、殿村を大手とした「安井ノ城」（相田上道氏日記）を太田垣



伏見野古戦場と内藤軍



光繼に構築を命じ、一三か年の歳月を費やして嘉吉三年（一四四三）に土塁をめぐらせた城を完成させたことから始まっています。（口碑）

この地に城を築いた山名宗全は、部下の四天王の一人で、朝来、養父両郡を本拠とする太田垣光景を初代の城主に命じたと言われています。しかし、光景の名は確たる史料に見出すことはできず、太田垣誠朝が初代城主とも考えられている。

応仁の乱（応仁元年、一四六七）の時、竹田城の城主太田垣景近は、長男とともに京都に赴いていました。その留守中に、丹波主護細川氏の臣内藤孫四郎、長九郎左衛門らが軍を率いて竹田城を攻略しようとして京都府境の夜久野に侵入したとき、景近の四男新兵衛尉宗近がこれを奇襲し両将を打ち取り見事に撃退しています。（応仁記）

以来、太田垣氏は七代の長きにわたり竹田城主として君臨します。

## 二 近世の新しい竹田城

### 織田軍（秀吉軍）の但馬進攻

永禄十二年（一五六九）八月一日、木下藤吉郎秀吉が二万の軍勢で但馬を攻撃し、わずか十日間の間に十八の城を攻め落とし、十三日には早々と京都に引き上げています。

その後、織田信長は全国制覇の手始めとして、天正五年



(二五七七)に羽柴秀吉に命じて、播州攻略に手がけました。秀吉は、同年十月播州に攻め入り、わずか一か月たらずの間に播磨の諸将から人質を取って帰服させることに成功しています。

### 羽柴小一郎秀長の竹田城攻略

天正五年(二五七七)、その勢いに乗じた秀吉は、弟の小一郎秀長(後の羽柴秀長)に三千二百余人の兵を与え真弓峠(現生野町)を越えて但馬に撃ち入らせています。山口(現朝来町)の岩州城を攻め落した秀長は、十月、太田垣土佐守の居る竹田城に攻めかかり、竹田の在々に火を放ち鉄砲三百挺で攻撃し、わずか三日間で攻略しています。

この作戦のねらいは、当時銀を多く産出する日本一の生野銀山の確保と、中国の毛利氏に対抗するためといわれています。また、秀吉は朝来、養父の両郡の確保と近畿以西の襲として、弟秀長を城代として入れ、竹田城の普請を命じています。

### 羽柴小一郎秀長の城普請と道路普請

秀長は、朝来郡の近郷の村々から約三千人の民百姓を集め、養父(養父市場)・高田、和田山・竹田、竹田・山口、山口・真弓を経て播州粟賀までの道路を一冬の間に完成させるとい



竹田城跡からの生野川風景



城跡からの城下町

もに、三千人の人夫のうち千人を竹田城の普請にあて、武将連にはそれぞれ工事区間を分担させ工事を行わせています。(信長公記、武功夜話、山口家文書) 築城の名手として有名な武将藤堂高虎が竹田・和田山間の工事を担当していたことから、竹田城の普請にもかかわっていたものと考えられています。秀長は秀吉の異父弟で終生秀吉の重要な補佐役であったことから、既存の竹田城は少なくともその主要部分の普請と、城下町としての竹田の町づくりを行ったものと考えられます。(栗田万喜三氏説)

#### 城主 桑山修理太夫重晴

天正八年(一五八〇)四月には、秀吉の命により秀長は六千四百人の軍勢で但馬に攻め入り、但馬一円を平定後出石城に城主として入ります。その後、天正十年には竹田城に桑山修理太夫重晴(一万石)が城主として入ります。重晴は、秀長の部将の一人として各地に転戦し、賤ヶ岳の戦いで武功を挙げたことは史書に残されています。さらに、天正十三年(一五八五)には、紀州を平定した秀吉の命により、秀長が領した紀伊・和泉のうち、和歌山城代に封じられています。

### 五 悲運の城主 赤松廣秀(斎村廣英)

天正十三年(一五八五)八月、桑山重晴の後を継いだのは播州赤松一族の赤松廣秀です。

廣秀は、天正五年(一五七七)、秀吉の播州進攻のときは、播州龍野城の



竹田城とその出陣

城主でしたが、戦わずして城を明け渡し平位郷佐江（現在のたつの市）に蟄居しました。その後、秀吉に願ひ出を行い蜂須賀正勝の配下に入り、中国攻めや四国攻めに加わりその功を認められ、竹田城主（二万二千石）に命じられています。時に廣秀二十四歳。

廣秀は、同年九月、秀吉が手がけていた竹田城の普請を引続き行うため、着任後ただちに地鎮祭を行い城の改修工事に着手し、最終的には慶長五年（二六〇〇）までの間に工事を行ったものと考えられます。（廣秀遺品の竹田城地鎮石や、中島新右衛門殿上の竹田城瓦に、天正十三年（一五八五）九月の銘が刻まれている）

また、廣秀は小田原城攻めや、二度にわたる朝鮮出兵の文禄の役（一五九二）と九三（一五九三）に約八〇〇人、慶長の役（一五九七）にも約八〇〇人の兵士を従え但馬の諸大名と共に参戦した記録（中川家文書・太閤記）が残っています。

#### 関ヶ原の戦い

廣秀は、慶長五年九月（一六〇〇）関ヶ原の戦いに先立ち、小出大和守らと共に東軍方の細川氏を守る丹後田辺城を攻めましたが、そのとき関ヶ原の戦いにおいて石田三成の西軍が大敗したことを知り、軍を率いて竹田城に撤退しています。

#### 鳥取城攻め

その後、廣秀は因幡・鹿野城主亀井武藏守茲距から、西軍方の鳥取城（宮部兵部少輔）を攻めているが難攻しているため、米糧があれば徳川家康に頼

んで西軍に組したことにについては許されるよう執り成してやるとの連絡を受け、直ちに軍を率いて鳥取に攻め入り見事に鳥取城を攻略しました。しかし、戦闘中に城下に火を放ち市中を焼いたとかどで家康の怒りにふれ、慶長五年十月二十八日、廣秀は鳥取の奥教寺において無実の罪をきせられたまま自刃させられています。(戒名一乗林院證可翁松雲大居士二時に廣秀享年二十九歳)。

嘉吉三年、山名宗全がこの竹田の地に「安井ノ城」を初めて築き、その後、天下人の豊臣秀吉の力による竹田城築城から一六九年日にして、空しくも「天下の山城」は焼城となり、武士の夢の跡は、草木の露となって消え去っています。

## 仁政の主君

赤松廣秀は、天正十三年から慶長五年までの一五年間、竹田城最期の城主として健康で、養父郡内の二万、千石を領有し善政を行い、民に「仁政の主君」として慕われていました。

惜しくも自刃された鳥取城近くの葬られた所には、赤松八幡神社として大切に祀られており、また、近くの奥教寺(鳥取)には、過去帳が保存されています。

一方、但馬では、領民が廣秀の死を悼み、養父郡八鹿町大森の地に「腕塚」を、和田山町竹田の法興寺には「供養塔」を建立し、今でも春と花のとぎれる間がないほど大切に祀られています。

## 六 赤松廣秀と藤原惺窩、姜沆

赤松廣秀は、近世儒学の祖である藤原惺窩(播磨美祿郡細川莊出身)と早くからの知人で、その勉学についても経済的援助を行っていました。また、慶長の役(慶長二年)で捕虜となって日本に連行された朝鮮の儒学者姜沆に儒学の教えを請うとともに、「四書五経」を譯書させるなど、惺窩朱子学の普及振興に大いに寄与しています。

また、姜沆は廣秀のために袖珍本(小型本)十六種を口筆で作成し手渡ししています。廣秀は姜沆にそのお礼として船一隻と食糧を用意し、姜沆の家族一〇名とその他を合わせた二八名の帰国への協力を行ったことは有名です。(看手録)



このことは、廣秀が城主として農業や養蚕を興し、領下を絹織物の産地として、また、城下町竹田を漆器産業の振興にも尽くしたと無関係ではなく、廣秀を「仁政の君」と尊び、民が行う祭礼（お城まつり）は儒学者藤原惺窩の説いた儒教の教である、今でも語り継がれています。（看羊録）

## 七 竹田城の崩壊

城主の赤松廣秀がこの世を去ってから、家康の命により竹田城を山名豊国（但馬村岡城主）が没収し廃城となりました。その後、主なき竹田城の破損・崩壊は全く手のつけようがなく、城櫓はすっかり取り壊され城門をはじめ各御殿、本丸、天守閣に至るまで、城下や近隣の百姓達が略奪し破壊するままであったといわれています。

赤松廣秀が家康の怒りに触れ自刃しなければ、この名城も今日のように石垣と瓦の破片のみ残すような悲惨な目にあわなくてもすんでいたのではないかと残念でなりません。

また、かつての宿敵同士であった山名家と赤松家が、幾星霜の歳月を経てそれぞれの子孫が和睦を結び、平成元年に駐車場横の谷の一角に碑が建立されています。



赤松廣秀供養塔（和田山町竹田法樹寺）



赤松廣秀供養塔「親像」といわれる（八雲町大森）



現在の家具

## 八 お城まつり

赤松廣秀は城主として、朝来養父兩郡の洪水源に桑を植えることを進め、農産を奨励し、城下町の産業振興などに大いに努めたといわれています。また、廃城二百年後の寛政十年三月二十八日（一七九八）に徳川幕府の許しを得て「虎臥大明神」の神号を許されて祀ることになりました。

赤松公の大祭については、寛延二年（一七四九）、天守台に虎臥大明神の小社を建立し行ったのが最初で、以後、竹田地区では五十年毎に大祭が執り行われ、近年には昭和二十四年に稚児行列や山車を中心とした三五〇年祭が臨時列車が出るほど盛大に開催されています。

また、祭礼も大正時代までは、天守台で行われていましたが、近年は麓の殿町集落で毎年四月二十八日（新暦）に厳肅に執り行われており、平成十二年四月二十二、二十三日には、「赤松公四〇〇年祭」が町を挙げて武者行列、大塩の獅子舞と屋台の共演、鉄砲隊、フリーマーケット、ヘリコプターの遊覧飛行を

中心とした「第一回わだやま「竹田」お城まつり」とともに第七回全国山城サミットも大々的に開催されました。（第一回も当地で開催）

## 九 竹田城のみどころ

### 竹田城の石垣

竹田城の特徴は、本丸中央の天守台（標高三五三メートル）を頂点に、それぞれ南北方面に南千畳、北千畳の曲輪が配され、さらに西側には花屋敷曲輪が配置されています。

そして、三つの曲輪（南千畳・北千畳・花屋敷）の標高はいずれも三三メートル程の高さとなっており、城郭全体の規模は、南北四〇メートル、東西一〇〇メートルで、あたかも大鳥が山頂から西方へ向けて両翼を広げ飛ぶ勇壮な姿となっています。

こうした有利な自然の地を巧みに利用し、山名宗全が嘉吉年間にこの地に最初の土塁の城を築き、その上に豊臣秀吉の命により城主となった赤松廣秀が文禄のころから天下人の秀吉の大きな支援を受け現在の立派な城に仕上げたものと考えられます。

往時の城郭普請には、武将と石工集団である穴太衆



旧赤松廣秀公館跡の米蔵（和岡山町竹田法蔵寺）





花屋敷側から見た竹田城跡略図

はもとより民百姓を動員し、人知の限りを傾注してこのすばらしい竹田城を築いたことと思われれます。

竹田城の石垣の特徴は、穴太積み技法による石積みとなっていますが、注意して石垣を見ると石垣の各面ごとに積み方が異なっていることがよくわかります。

栗田純司氏の説明によりますと「この城の主要部分の石垣普請は、おそらく短かい期間に慌てて工事を行ったものと考えられる。當時は百人を超す石工の頭領を全国各地から動員し、それぞれ頭領に石積みの一角を任せるとともに、その頭領の下に多くの人夫を配し、山頂を中心として周辺から膨大な石材を集積し8649平方メートルの壮大な石積みを完成させたものと思われれます。

現在の工事に換算してみると、数十億円をはるかに越えると思われれます。往時の状況を想像してみると天下人（豊臣秀吉）の重要な大事業であったことがうかがえます。」とのことでした。



## 十 竹田城を歩く

### 大手口

大手虎口は、城の表玄関です。この虎口は、竹田城の中でも最も立派な出入口となっています。

近世初頭になってから城の防御性を充実させるために創案された櫓形虎口といわれています。

### 大手口から観音寺山の出丸

大手見付櫓の石垣下の犬走りをさらに北側に急な坂道を下っていくと、観音寺山山頂の土塁造りの出丸にたどりつくことができます。そのまま昔からの遊歩道を進んで行くと、観音寺と竹田小学校に下りていくことができます。

### 北千畳から本丸と平殿

大手口の虎口を入り階段を登ると、まず目の前に広がるのは広大な北千畳の曲輪です。



石垣城郭建設途上の竹田城鳥瞰図

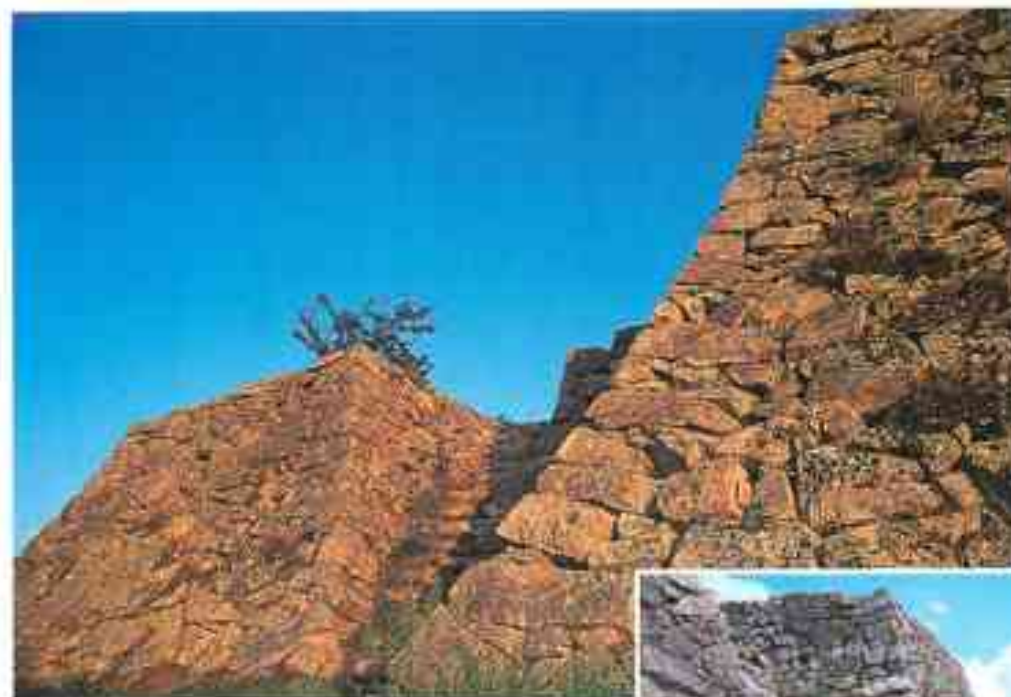


南千畳から天守を望む



北千畳から天守を望む





竹田城天守台石垣の「段り」



この北千畳は、本丸を中心として南千畳と肩を並べる対照的な位置にあります。この北千畳には小さな井戸跡が一つ所確認されています。

次に、広い北千畳から本丸、平殿をめざすためには、三の丸に進む櫓形虎口と、武の門、二の丸への虎口を通らなければたどりつくことができません。

### 本丸と天守台

二の丸からいざ本丸へ。本丸北側の側面にあるスロープ状の通路を進むと、本丸の虎口にあたります。この虎口は大手口と同じ「外櫓形」と呼ばれる形です。本丸は、地形に即した多角形で、その本丸の南東部に本丸の石垣ラインから前に一段せり出す形で城下を見下ろすように天守台が構築されており、美しい本丸御殿があったところです。天守台は、一〇・七メートル×二二・七メートルの規模でややいびつな形となっており、いにしえの壮大な天守閣の建物の礎石をいくつかみることができます。

### 南二の丸から南千畳

さて、本丸の急な階段を降りて南千畳へ向うと、

南二の丸に至るまでに比較的大きなくい違いに造られた樹形虎口があります。この平段には、全国でただ一つの大変貴重な「くい違いに造られた槽台の石積み」があります。

次の南千畳は、北千畳と位置的には対に、同じ高さに設けられている曲輪です。後で説明します花屋敷と同様の内ふところに二か所の虎口をもつことで共通しています。

この二か所の虎口のうち東側の虎口には、なぜか石垣が施されていない部分がありますが、栗田純司氏の話によれば、「この部分には基礎工事を行った形跡はなく、当時、南千畳と南門などは未完成であったと考えられる。」とのことでありました。

### 花屋敷（花殿）・井戸跡

さて次は、南千畳から降りてもと来た道を戻り、本丸西側から花屋敷へ下りてみましょう。花屋敷へ降りる道は、今までの道とは異なり急な坂道となっています。造成前の地形はかなりの断崖であったと思われる、この花



平段。南二の丸樹形虎口



北千畳の井戸跡





花屋敷の曲輪



三の丸下の井戸跡

屋敷曲輪の大きさを確保するために、大きく削平したものであろうと推測することができます。特に、この花屋敷には他の曲輪にはみられない、見事な鉄砲用狭間が築かれ堅固な防御設備となっていることが特徴的です。

次に、この花屋敷の北側から三の丸下の谷に向かって少し下っていきますと、石垣で囲った井戸跡にたどり着きます。

花屋敷の南側で南二の丸下にも井戸があり、地元には古くから、西の大路山の千眼寺からこの井戸まで銅管を敷設し、城中の飲料水を確保するために水を引いていたとの言い伝えが残っていますが定かではありません。

## 十一 遺構群

### 堅堀群

敵がこの城を攻めたとき、敵の兵士達が横移動ができないようにするための堅堀が、自動車道路の大手廻り付近から南千疊にかけての斜面で見ることができます。また、観音寺山山頂から竹田向きに一本の大堅堀と、三の丸東側から南千疊の東側までに八本、南二の丸の西側に五本の小規模な堅堀（畝状堅堀群）が現在も残されています。

### 石取り場

当時の城普請には、この古城山の山頂を中心に膨大な石材を調達していたものと思われます。この山の山頂付近では、二の丸東側と南千疊の東側から尾根付近の四か所を含め、六か所の採石跡が残っています。

### 太田垣氏居館推定地

竹田城の北側の安井集落西側山麓部に、竹田城から延びる二本の尾根に囲まれた周囲より二〇メートル程高い所があり



石取り場跡



大手廻り付近の大石場





朝来山老杉



朝来山の桜と遠望

ます。ここは、地元で「トクサン屋敷」「黒田大夫」と呼ばれ、古くから太田垣氏の居館跡と言いつたえられており、赤松氏以前の城主が住んでいた館の跡ではないかと思われまふ。

## 十二 城跡からの眺望

この城跡の天守台に登って眺めてみると、南に中国山脈や朝来連山の山々が、東には円山川の対岸の金梨山と山東町の粟鹿山、遠くは丹波の大江山まで眺望することができ、天候の良い日には遠く北但馬の山々も望むことができます。

古城の天守の上によじ登り

床尾見つれ大江山もすこし

富田碎花

とも詠まれています。

春には、対岸の朝来山山麓に赤松廣秀が苗木を各地から取り寄せ、前庭に見たてて植えたといえられる山桜が、手に取るように迫まりその風情は特に絶景です。

山桜 ちらるを惜しめと ひらひらと

京極杞陽

この花に 武将ほろびし ものがたり

京極昭子

また、夏から秋の冷えた早朝には、すばらしい雲海が発生し、雲海上に浮かぶ城跡の姿はとても美しく、これを写すために未明から城跡に登る人も多く、大変すばらしい写真が数多く撮られています。

秋は紅葉の山々を背景に、冬は雪景色等々こけむす城跡の石垣はそれぞれ四季を通じて風情ある顔となり、写真の題材にこと欠くことはありません。

南千畳には明治三十二年に

夏草や 兵どもが 夢の跡

芭蕉

の碑が建てられています。

また、城下の街並みは、往時から播但道、山陰道の接点にあり、交通の要衝として重要な地の山頂に竹田城を築き、東側山麓に広がる河川氾濫原を自然の要害として防衛された絶好の位置に、寺社仏閣を防衛施設として南北と東に配して形成したかものと思われれます。



寺町通りの風景



南千畳の碑





新道の碑と登山口

## 十三 登山道

昔から城跡への登山道としては

- (一) 赤松公の屋敷跡に建立されたという駅裏の法興寺北側から大手口に至るルート
- (二) 竹田の古城山の山麓に祀られた表米神社の裏を経て南千疊に至るルート
- (三) 町の下の観音寺山山麓の恵眼谷から大手口に至るルート
- (四) 西側の安井谷から大手口に至るルート

の四コースが登山道といわれています。

昭和七十一年に、新しく新町の町頭から与一谷の北側を通り大手口まで至る極狭の登山道路が、宗教法人大本教と竹田町の手により新設されました。その後、昭和四十年代に現在の自動車道路に新設改良が進み、今では国道三一二号線沿いの久世田地区からと殿地区からの二つの道路が大手口へ通じる自動車道として完成しています。

## 十四 城下町の移り変わり

竹田城の築かれた古城山の山麓と円山川の間を南北に細長く軒を連ねるのが竹田の城下町です。「竹田」の名がいわれ

るようになったのは、山名宗全が部下の太田垣氏に城普請を命じてここに城を築き、城主として住まわせるようになったところからのことと考えられます。

また、天正五年の羽柴小一郎秀長が軍用道路を完成させたことにより、この道路を中心として山麓には城主や武家屋敷を配置した城下町をつくり、秀長が、出石、和歌山、郡山に城を築き「市」を開くための町づくりを行ったことと同じ手法であったのではないかと思います。

今でも、山麓に残された寺町通りの城主などの屋敷跡（法興寺・勝賢寺・常光寺・善護寺）には、見事な石垣や石土台などが美しい白壁等に守られながら大切に残されています。

一方、町内の民家の中には、天正年間の竹田の城づくりのために、京都から来た宮大工の末裔といわれる二宮氏、長谷川氏などの家々が数代にわたり住み続けられており、また、この町づくりのために各地から移り住んだことを示す播磨屋、姫路屋、加古屋、丹後屋、宮津屋、梁瀬屋、額田屋、岡田屋等々の屋号が最近まで残っていました。また、業種名には組屋、塩屋、木綿屋、漆屋、味噌屋、鍛冶屋、鍛冶屋などの屋号を持つ家が多いことがあげられます。

大正年間までは、旅館、料理屋、旅籠、腰掛茶屋、菓子、魚、雑貨屋などの商店が軒を並べ、漆器、家具を業とする店も数多くありましたが、いまでは町特産の竹田の家具以外はほとんど姿を消してしまいました。



古い町並み風景





表米坪の相模橋

当時、絹、指物、蚊帳、布団、漆器などを行商して生計を立てていた人が多く住んでいた関係上、遠くは福井、鳥取、九州まで足を延ばして商いを行っており、今でも「竹田商人」の名前が遠方で呼ばれています。

しかし、慶長十五年（一六一〇）、宝暦十二年（一七六二）、明治十年四月三十日（一八七七）の大火災により城下の家屋の大半が焼失し、さらに、水害などで往時の城下に関する建造物や記録などが消滅したことは非常に残念でなりません。

## 十五 竹田城に関係する寺院・神社など

寺院については、駅裏を中心に六か寺ありますが、これらすべてが創建当時の位置を示しているのではなく、竹田城が廃城になり、城下町の機能を失ってから後に現在の位置に移されています。

また、神社については、二つの大きな神社が造営されていますが、その創建については、嘉吉年間から文禄・慶長期にかけてであります。したがって、竹田城成立と密接にかかわっており、城と城下の防衛施設として巧みに配置し城下町を形成していたことがうかがえます。

### 見屋山 法樹寺

天正六年（一五七八）勝誓ノ開祖、曜萬院と号して川原町（現在の東町）に創建。慶長十一年（一六〇六）嚴誓のとき、竹田城最期の城主赤松廣秀公の旧館を請うて現在地に移る。「竹田誌」以前は境内に赤松氏時代の建造物の一部（米蔵）があり、その建物の中には朝来山中腹の温泉郷にあった薬師堂が移されて祀られていました。しかし、平成十六年に発生した台風二十三号の被害を受け建物

は流失しました。また、城の扉と赤松夫妻が愛用していた扇、櫓も寺宝として大切に保存されており、庭には芭蕉塚の碑が建立されています。

境内の裏手には、赤松廣秀公の墓碑が祀られており、その参道には駅裏の登山道に建立されていた西国三十三ヶ所の石仏が、住職の手により現在地に移設され大切に祀られています。

#### 虎城山 勝賢寺

天正五年（一五七七）以前に、金梨山山麓の迫間村口（現在の和田山病院北側）に創建と思われる。

寛文年間（一六六一～一六七二）に現在地（赤松公の家臣、平位善右衛門の館跡）に移ると朝来誌にあります。

桑山修理太夫重晴城主（一五八二～一五八五）の長子夫婦の墓碑と伝えられる五輪塔が二基ありますが、詳しいことはわかっていません。

#### 黒田山 常光寺

文禄三年（一五九四）、金梨山の麓に創建。慶長十五年（一六二〇）に現在地へ移されています。（朝来誌）

初代城主太田垣光景（一四五五～一四七九）の菩提寺として墓碑があり、大切に祀られています。また、但馬で一番古いといわれる石灯籠があります。

#### 慈雲山 善證寺

暦応元年（一三三八）南朝暦では延元三年。金梨山山麓に創建。寛永二年（一六二五）現在地へ移されています。（朝来誌）

当山には、竹田城にかかわりのある模様が保存されています。

#### 石橋

寺町通りの四か寺の正面入口に、石橋が架けられていますが、このなか



寺町通りの風景



の「基に恒馬で最も古い宝永四年（一七〇七）の文字が刻まれています。これらはいずれも江戸時代に造られており、恒馬で確認されている七基の石橋の内五基がこの竹田地区に集中しています。

### 吉祥山 観音寺

天文年間（一五二一～一五五五）に、現在の観音町に創建。天正年間（一五七三～一五九二）に、現在地へ移されています。

### 法蓮山 妙泉寺

永正年間（一五〇四～一五二〇）加都村茨加に創建。寛永年間（一六二四～一六四四）現在地へ移されています。（朝家誌）

### 表米神社

日下部氏の祖、表米親王を祀る。天正九年（一五八二）、加納丘（久世田）に創建。天正八年（一五八〇）焼失。その後、天正十四年（一五八六）町の西と加納丘（久世田）の二か所に建立。宝永元年（一七〇〇）現在の古城中腹三本大杉に、本殿、舞神殿、神官邸を建造する。太田垣氏の菩提寺といわれています。（兵庫県神社誌）

この境内には全国でも珍しい半円形の六段の石積み相撲俵敷席があり、毎年秋祭り（十月）には氏子の子供達の勇ましい

奉納相撲が行われています。（県文化財指鑑）

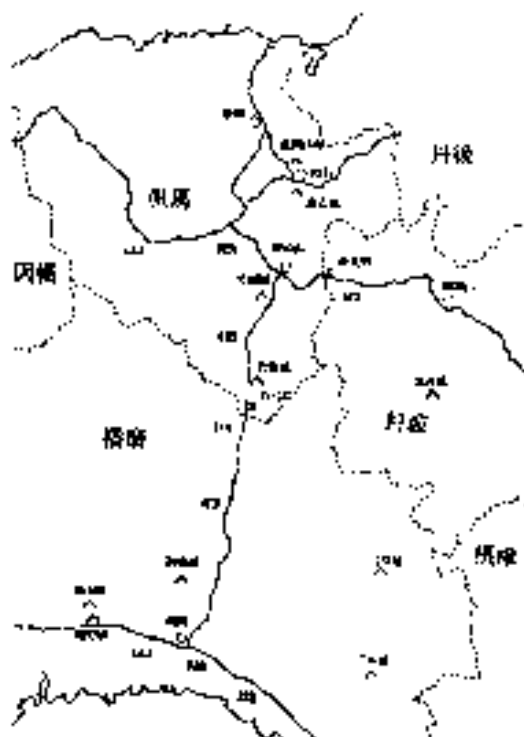
### 諏訪神社

嘉永年間（一四四一～一四四四）金栗山山麓に肥前長崎の諏訪神社の規模を模して山名宗全によって創建され、竹田城の守護神として尊崇するとともに、領内の鎮守として領民に敬神の念を教えました。（朝米誌）

この神社では、十月の秋祭りに勇壮な御輿の川渡御と町内巡行のお祭りが隔年ごとに、本宮祭早朝の朝霧煙るなか厳肅に渡御が執り行われています。

### 番蔵院千眼寺跡

創建時期は不明ですが、竹田城築城と同時に建立されたと思われます。竹田城西側の大崩山の流谷の湧き水を、竹田城まで二キロ



竹田城の歴史関係地図

メートルにわたり銅管を埋設して送水し、その水源を守るために寺院を仮装建立したといわれています。古老の話では、羽柴小一郎秀長の竹田城攻略の時に老妾が秀長に寺院のありかをつげ口したため、太田垣輝延が敗れたとの言い伝えが残っています。

つわものの並居しあとやかぶと花

魚沼和尚

## 十六 いにしえの郷

### 一 加都郷

竹田城跡の北東に位置する加都郷は、日本書紀にも登場する集落で、応神天皇（二七〇～三一〇）の時代には、百済の国から王仁（わに）という人物が論語や千文字を持参して来日、唐の国からは弓月君や秦氏一族が養蚕や絹織物の技術を持った渡来人が来日しており、大陸文化を盛んに取り入れるなど国際的な時代でした。

その技術者の一部がこの地にも派遣され、加都平野部（通称 加都千石）に桑を植え養蚕を奨励したことで、それ以降絹織物が多く産出されるようになってきました。また、この地区には秦氏の墳墓だと伝える「王塚」が集落の中央に大切に祀られています。

### 二 歡喜光院（養賢院）

大化の改新の七世紀ころ、わが国では唐文化の吸収に懸命で、遣唐使の往来も頻頻に行われていました。聖武天皇は奈良薬師寺の僧行基に命じて奈良の大仏建立に着手しています。天皇は、行基の功績を賞でて婦人田を与え、畿内に四十九院の太寺院建立を許されています。



「王塚」

行基は、四十九院の一院を、金梨山北方に面する加都郷を「この世にも希な楽園の地」とあるとして、莊嚴な美賢院を創建しています。またの名を「歡喜光院」といいます。

この加都郷には極楽寺・蓮華寺・恵林寺の三か所が受を御やかし、七堂伽藍等々二万坪の山内に莊嚴華麗な大殿堂が極楽浄土を現出し、鐘声は朝な夕なに三宝の響きを遠く鳴らし、難和谷には普賢院、安井谷には一乗院という分院が建立されています。

### 三 歡喜光院の焼き討ち

朝來都大領（日下部織主）は、大の敬神主義者で、日本は神の国である。しかるに他国の邪教仏教を祀り世民を惑わすことは、國を滅ぼすことである。と法皇隆盛を悦ばず、大領と歡喜光院との間に大きな溝が生じ何かと紛争が絶えませんでした。時に延暦元年（七八二）、両者の争いは極点に達し、昨日まで倅客を誇った法の大殿堂もことごとく織主の軍兵の電光石火の奇襲をうけ、極楽寺、蓮華寺、恵林寺も別院の普賢院、一乗院とともに島有に焼し人の世の真れを留めるに至っています。

この時、歡喜光院の主僧大権僧正光信法師は、一四、五名の徒僧に守られ兵刃を東河原尾山中に避けることができました。その翌年の夏、大領織主は世を去り、やがて織主の長子日下部太郎貞休が大領職を継承しています。

貞休は父の織主の余りの暴挙を誇らず、歡喜光院を焼滅させた非道を恥じ、承和元年（八三四）室尾山に法宝寺の一院を寄進しています。

この法宝寺の本尊薬師如来像は、歡喜光院当時の名作と伝えられており、仁王門の仁王像並びに寺宝の十数体の木像は、難和村普賢院遺跡の木像と形状刀彫を一つにするもので、いずれもその體を逃れた歡喜光院に連なる遺品であることがうかがえます。寺地名も残っています。

加都の歡喜光院の跡は、現在も地域の地名に古い面影をとどめており、極楽寺・蓮華寺・恵林寺はそのまま地名となっており、境御堂、院の馬場と称されている田圃もあります。その他、大石灯籠石といわれている巨岩、石仏など黙々として今も古代を哀しく物語っています。



歡喜光院の石仏・石灯籠

#### 四 北野天満宮

文明五年（二四七三）、加都郡安井の庄に、どこからともなく流浪の鯉に成れ病に悩む一人の修験者が足を止め静養をしていたが、自分の余命を知ったのか里人をまねいて、「長い間大変世話になったが命数が尽きた。ついては、ここに一体の大白在天満天神の木像を奉持しているので、これを祀ると思案。疫病は立ちどころに退散するであろう。」と遺言しこの世を去っています。村民はその修験者を丁寧に弔うとともに、この大白在天満天神の像を殿・奥（現・三波）・加都の鎮守神として、安井の向山の麓を切り開き、社殿を造営し大切に祀っています。

#### 五 元文一揆

元文三年（一七三八）十二月二十九日、朝来郡の農民（主に山重、和田山）三千人余りが郡庁をかがけ竹田の河原に蜂起し、大挙して生野代官所に貢租の減免と夫食（救済米）の貸付けを強訴した「元文一揆」がおきています。

この時、代官の小林孫四郎は農民の要求を全面的にのみ、不作の者は免租、その他の者は三割の減免、さらに一〇〇石につき二〇石の夫食を貸して与えるとの証文を渡していますが、これは暴動回廊のための空約束でありました。

農民が引き上げたあと、代官は一揆の首謀者を捉え、二十三名に死罪等の厳罰を申し渡しています。安井庄殿村庄屋 保兵衛（四十三歳）、安井庄殿村百姓 儀右衛門（二十七歳）他三名が京都で討ち首のうえ竹田下河原において五日間晒首の刑に処せられています。また、加都市場村庄屋 牧田弥兵衛（四十八歳）、安井下村の市三郎（三十二歳）他六名は忠岐の島に流島に処せられ、いずれも忠岐の島の土となるなど大変厳しい処分でありました。

小林孫四郎が代官として呼ばれていたのに対し、三十八年後に生野代官として着任した子供の小林孫四郎殿用は、堤防を改修するなど善政を行ったことにより、村民に慕われ「小林大明神」として祀られています。



『元文一揆』の初代生野代官の墓



## 六 高瀬舟と新川溝

宝暦三年（一七五三）、磯野屋亀松が生野代官の許しをもらい、円山川の清流を利用して船（高瀬舟）で荷物を豊岡まで運ぶ運搬業を始めるために、加都の西南の朝来川から御堂溝（新川溝）を新たに造営しています。この新川溝の新設により加都の百余町歩は言うまでもなく、下流の比治、市御堂、法興寺、牧田地区の三十余町歩の農地が今でも大きな恩恵を受けています。

## 七 絹屋溝

竹田町内は大洪水のたびにその水のはけ場に困っていました。文政二年（一八一九）の大洪水時にも、町原（新町）の堤防が崩れ、町内が泥海となったうえ悪疫が発生したり、たび重なる大火災の被害をうけるなど水年困っていました。

竹田上町の絹屋泊右衛門は、新しい井堰と新しい溝を造る必要があると、自ら私財を投じて調査設計を行い町役場へ提出するなどその実現に奔走し、文政七年（一八二四）に竹田の上の円山川に新しい井堰と新町西裏に新しい溝を作り、上町から下町の円山川までの町内を貫通する幅一間半、総延長三二〇余間の古い溝を改修し、現在の竹田川としてその大事業が完成しています。

この溝の完成により、川に接する者の中から新たに水車による商いを行う者も出てくるなど、当時としては町を挙げての新しい産業振興策であったと思われる。

地区住民は、この泊右衛門の功績を讃え記念碑を建立し、この水路を「絹屋溝」と呼び、現在も大切な防火用水、農業用水として大いに活用されています。

しかし、古文書によると、この事業の実施にあたり加都郷の市場村、寺内村及び市御堂村と竹田町との間において農業用水の水争いが度々発生し、生野代官所等への訴訟を起こすなど大きな問題に進展したこともあり、苦難の大事業であったことがうかがえます。



絹屋溝（現在の竹田川）

## 十七 昭和の竹田の町づくり

昔は、城跡に立って車を望むと山桜の名所「立雲峡」を一望することができ、その麓は「出作」と呼ばれる棚田がつづき、隣の山東町へ通じる山道が一本あるほかは人家もなく、美しい黄金色の稲穂で一面に埋めつくされていました。

昭和四十年代に入り、ここに福祉施設をとの声が高まり、昭和四十二年公立北兵庫整形外科センター（現在の朝来和田山医療センター）が最初に建設され、その後、県立老人体養ホーム立雲荘、県立北兵庫のじぎく園（現在の県立和田山特別支援学校（小・中・高等学校））、聖隷福祉事業団の重度身体障害者授産施設恵生園、同療護施設真生園、特別養護老人ホーム平生園、デイサービスセンターさくららの苑などが相次いで建設されました。

最近では、「山城の郷づくり構想」に基づき国史跡の竹田城跡、県立自然公園の立雲峡、寺町通り、水辺の楽校、山城の郷等々の整備が進み、立雲峡の桜まつり、秋祭り、お城まつりなどの伝統行事等を活かして、「観光による町づくり」が町と地域を挙げて取り組まれています。



平成の安井谷の風景



山城の郷（清たけ）



平成の幻の天守閣



平成の幻の大手門

## 十八 平成の幻の竹田城

平成元年十一月文化庁の許可を得て、角川映画「天と地と」のロケーションが地域住民総参加の中で大々的に行われました。城跡には三億円の巨費を投じた天守閣や大手門、堀等のセットが本物の城郭のように建設され、まるで竹田城が一夜にして出現したかのように大変感激したものです。

町では、竹田城の出現によりライトアップをするなどその対応に大騒動、竹田の街は連日連夜大勢の見物人であふれ、自動車道路や登山道は数珠つなぎとなり多くの見物人達で賑わいました。



## 十九 ふるさと散策

一月	一日	新春マラソン大会
一月	十日	十日えびす（二宮神社（和田山））
一月	十七、十八日	厄神祭（益岡・加都神社）
三月	春分の日	百々手祭（熊野神社、久留引）注（女人祭調）
三月	上旬	古元稲荷大明神初午祭（竹田）
四月	上旬・下旬	立雲峽桜まつり（朝来山）
四月	中旬	糸井溪谷桜まつり（糸井溪谷）
四月	中旬の日曜日	虎臥大明神祭（おだやま「竹田」お城まつり（竹田）
六月	上旬・中旬	サクラランボ祭り（野村（東河））
七月	第二日曜日	川すそまつり（土田（大蔵））
七月	第二日曜日	寺内さんごか踊り（山王神社（糸井））
七月	二十三日	竹田松明祭（愛宕神社・竹田）
七月	午の日	吉光稲荷大明神夏祭（竹田）
八月	十六、十八日	竹田地蔵まつり・栄町地蔵まつり（竹田）
八月	二十、二十三日	和田山夏まつり・地蔵まつり（和田山）
九月	上旬・下旬	フルーツランドブドウ祭り
		（東和山・久世田・寺内・高生田）

十月	秋分の日	竹田秋まつり（竹田）
十月	終焉の祭（下島宮）	和田山秋まつり（和田山）
十月	中旬	和田山町食文化まつり
		（和田山町内）
十一月	第三日曜日	宮澤楽（石部神社（宮））
十一月	上旬	和田山町文化祭
十一月	中旬	和田山町駅伝大会

## 二十 地場産業と特産品・お土産

◆手造りの婚嫁家具 ◆金箔バネ ◆黒大豆 ◆朝米のお米 ◆かぐら漬け ◆黒豆みそ ◆カニと但馬牛の料理  
◆サクランボ ◆岩津ねぎ ◆竹田城カレンダー

※右記以外にも多くの土産物を現在開発中ですので、お近くのお店でお尋ねください。

## 二十一 観光コース

〔町内の代表的観光地〕

〔竹田地区〕

〔竹田城跡〕〔寺町通り〕〔赤松廣秀墓碑〕〔太田照光景墓碑〕〔但馬吉野の立雲峠（山彦）〕〔山城の郷〕

〔虎臥城大橋〕〔大將軍スギ〕

〔糸井地区〕

〔郷土歴史館〕〔糸井の大方ツラ〕〔糸井漢名〕〔床尾山〕〔関石落下跡〕

〔大蔵地区〕

〔つつじ公園（松寿公園）〕〔俱山地蔵巡り〕〔高田の一本橋〕

〔和田山地区〕

〔赤瀬神社〕〔但馬六十六ヶ所地蔵四十四番地蔵〕

〔東河地区〕

〔白井大町公園（フジ）〕〔夜久野高原（八十八ヶ所巡り）〕〔心説尼墓〕〔水月庵〕〔サクランボ狩り〕〔ブドウ狩り〕

「代表的町内観光コース」(一日)

一、「但馬吉野」「山桜の立雲峡」と「竹田城跡」歴史ハイク

竹田寺町通り→竹田城跡登山口→竹田城跡天守台→南千疊→但馬吉野の立雲峡

二、「竹田城跡」と山城の郷歴史ハイク

和田山駅→赤淵神社→乳ノ本庵→山城の郷→竹田城跡→寺町通り→竹田駅

三、「竹田城跡」歴史ハイクと糸井溪谷散策

わだやま観光案内所→寺町通り→竹田城跡登山口→大手門→北千疊→天守台→南千疊→山城の郷

→郷土歴史館→糸井溪谷

四、「歴史ハイクとフジ観賞」

和田山駅→水月庵→心涼尼墓碑→白井大町公園→夜久野駅

「広域観光コース」(一日)

一、「史跡生野鍛冶山」と「竹田城跡」歴史ハイク

生野鍛冶山→鍛冶山湖→寺町散策→竹田城跡→山城の郷

二、「朝来芸術の森」と「竹田城跡」歴史ハイク

朝来芸術の森→多々良木ダム→寺町散策→竹田城跡→山城の郷

三、「山東ヒメハナ公園」と「竹田城跡」歴史ハイク

わだやま観光案内所→竹田城跡→山城の郷→寺町散策→ヒメハナ公園→夜久野高原

四、「竹田城跡」歴史ハイクと出石城

わだやま観光案内所→寺町散策→竹田城跡→山城の郷→出石城



# 22 竹田城関係略年表

年 号	西 暦	記 事
永享 3	1431	山名清康、竹田城構築に着手する（口碑）
康吉 3	1443	竹田城完成する。1名持量、初代城主として太田順光景を配すという（口碑） （注）太田地頭職の初代城主とする説もある
享徳 4	1455	山名清康、備前赤松別当を改める。太田順光景、先陣として参戦する（『備前記』）
寛正 5	1465	太田順景没。第2代竹田城主となる
応仁 1	1467	「応仁の乱」おこる
応仁 2	1468	組川軍、朝倉郡に侵攻する。奥近江・京近（新井宿）。夜久野にてこれを退え撃つ（『備前記』）
文明 11	1479	太田宗宗朝、第3代竹田城主となる
延應 4	1492	太田道俊朝、第4代竹田城主となる
大永 1	1521	太田宗宗朝、第5代竹田城主となる
天文 7	1538	太田宗宗朝、第6代竹田城主となる
天文 11	1542	熊延、生野郷に銀山を開く。山名祐親支配する
弘治 2	1555	朝倉、加藤から銀山の所有権を奪い取る
永禄 12	1569	木下藤吉郎秀吉、伊豫を攻める。生野銀山から此間山城まで10日間で1日城を陥落させる（『朝田家書翰』）
永禄 13	1570	太田宗宗朝、第7代竹田城主となる
天正 1	1573	毛利輝元、伯耆から岡山へ入寇する。但馬段原の戦役を勝った山名高直、太田道・相模・田原府から毛利軍に降伏する（『兵部卿史』）
天正 3	1575	丹波赤松が城主野野原正、竹田城・青子山城を包囲し、奪取する明光秀吉、丹波を攻撃する。加野は黒井城へ逃く（『古川家文書』）
天正 5	1577	羽柴秀吉、備前を平定したのち、小一郎秀長をもって但馬を侵襲する 山口・岩淵の両城を陥落し、北の山さおいかって小（太）田は民がたてこもる竹田へ攻めかかって、これもまた退散させると早く兵馬を命じて、弟の太下小一郎（秀長）を総代として入れおく。（『信長公記』）
天正 6	1578	秀吉、生野山法雲寺に祭祀を授ける 秀吉、再び小一郎秀長を竹田城に入れろ（『信長公記』）
天正 8	1580	秀吉、伊豫を攻める 太下小一郎、竹田城を陥落させ、城を改修し人数を入れおく。 （『信長公記』）（この時点で、太田の竹田城主は終る）
天正 9	1581	豊前、鳥取城攻めに参加する
天正 10	1582	高山樗牛太田朝、竹田城主となる。所領10,000石（『播磨通』）
天正 11	1583	豊前、関ヶ原合戦に出陣し、軍功をあげる
天正 13	1585	豊前、和歌山城攻めとして参戦される 赤松弘秀、竹田城主となる。22,000石
天正 15	1587	広秀、九州・奥平氏討伐に参戦する
天正 18	1590	広秀、後陽成天皇の御祭典への行事に出陣する
天正 18	1590	広秀、小田原攻めに550人を率いて参戦する
文禄 1	1592	文禄の役。広秀、参戦し、「わく子城」（西津城）を取り囲む
文禄 2	1593	広秀、朝鮮から帰国する
文禄 3	1594	広秀、伏見城攻めに参加する。この時、22,000石
慶長 2	1597	慶長の役。広秀、再び参戦する
慶長 3	1598	（秀吉、大阪城に没す）広秀、朝鮮から帰国する
慶長 3	1600	関ヶ原の戦い。広秀、西軍に属し月夜田辺城を攻める。西軍敗戦後、鳥取城攻めに加わるが、大火の責任を問われ鳥取・鳥取で自決する（10月28日）竹田城主・鳥取となる
元和 1	1615	鳥取代官所支配下となる
明治 1	1868	久美沢・生野（明治2）・豊後（明治4）に属する
明治 9	1876	兵庫縣に編入される
昭和 4	1939	竹田町役場の所管となる
昭和 13	1943	国史跡に指定される
昭和31	1956	竹田・和山・廣田町の合併（成和山町）により、大字竹田（竹田町配区）の所 有となる
昭和45	1971	石見県元工業に指定する
昭和52	1977	「竹田城保存管理計画案」を策定する
昭和55	1980	石見県元工業を完了する

## 「国史跡 竹田城跡」

竹田城跡(別名「虎臥城」)は、兵庫県和田山町竹田の古城山の頂(標高353.65m)に築かれた山城です。この城は、多くの大名が勢力を競いあつた1477年~1568年の「戦国時代」に、この地方の有力な支配者であつた山名持豊(宗全)が、15世紀半ばに重要戦略拠点として土塁の壁を築いています。16世紀後半、豊臣秀吉の命を受け但馬に侵攻した羽柴小一郎秀長が、その壁を利用し新しい城郭を手がけ、その後、赤松廣秀が豊臣秀吉の支援を受け、現在のような重たな石積みの特徴な城郭(地面積18,700㎡、南北約400m、東西約100m)に造りかえたと言われています。この城の石垣の特徴は、自然の石を用いた「穴太壁」の技法で築かれており、山の地形を巧みに利用しながら曲輪や櫓台を階段状に配置し、中央の最高所には天守台が築かれています。竹田城最期の城主赤松廣秀は、近世儒学の祖である藤原惺窩と友人で、慶長の役(1597年)で捕虜となつた朝鮮の儒学者姜沆に儒学の教えを請ひ、「四書五経」の浄書の作成を依頼しています。廣秀は、そのお礼として船・食と食糧を用意し厚遇への協力を行ったことは有名です(看羊録)。このことは、廣秀が城主として農業や養蚕を興し、領下を絹織物の産地として、また、城下町竹田を漆器などの振興にも尽くしたことと無関係ではなく、廣秀を「仁政の君」と呼び、民が行う祭礼(お城まつり)は儒学者藤原惺窩の説いた儒教の教えであると、今でも語り継がれています。

今後とも、全国に誇る貴重なこの歴史遺産を、地域住民とともに大切に守り次の世代へとつなごうと思います。

## 일본의 역사유적 竹田城跡

竹田城跡(발명虎臥城)은兵庫県和田山町竹田의古城山の정상에(표고353.65m)구축된 산성입니다.

이 성은 많은 다이묘(大名)들이 서로 다투었던 1477~1568년의「전국시대」에 이 지방의 유력한 지배자였던 山名持豊가 15세기 중반에 중요한 전략적인 기점으로 삼아 만든 城郭입니다.

16세기 후반기에 豊臣秀長の 명령으로 但馬지방을 정복한 羽柴小一郎秀長이 이 성시를 이용해서 새로운 축성공사를 시작했으며 그 후에 赤松廣秀가 전국을 평정한 秀吉의 지원을 받아 현재와 같은 웅장한 석성(총면적 18,700㎡, 남북약 400m, 동서약 100m)을 축조했다고 합니다.

이 성의 동남의 특징은 주로 자연적으로 축조되었다는 것입니다. 산의 지형을 교묘하게 이용하여 曲輪과 櫓台를 계단식으로 배치하고 중앙의 가장 높은 곳에는 天守臺를 축조하여 서로가 잘 어울리고 있다는 것입니다.

竹田城의 마지막 성주 赤松廣秀는 근세유학의 시조 藤原惺窩의 우연입니다. 1597년에 秀吉가 조선에 개원할때 일본군의 보수가 된 조선의 유학자 姜沆에게 四書五經의 장서를 요청했습니다. 廣秀가 그 보수로써 배 한척과 식량을 구입하여 그들이 귀국하는에 협력했다는 것은 유명한 이야기입니다.

이러한 사실은 廣秀가 城主로서 농업과 양잠을 진흥시키고, 양토를 전직관의 산지로, 또한 竹田를 가꾸어 활기의 명산지로 발전시킨 것과 무관한 일이 아닙니다. 따라서 廣秀를 「名君」으로 존경하고 백성들이 기뻐하는 祭禮(お城まつり)가 유학자 藤原惺窩가 가르쳐 준 것이라고 지금까지 전해지고 있습니다.

앞으로도 전국적으로 자랑할 수 있는 귀중한 역사유산을 지역주민들이 협력해서 지켜, 다음 세대에 이어지기를 기대하고 있습니다.

## TAKEDA CASTLE RUINS

The ruins of Takeda castle (also known as Torafusu castle) are located at the top of Kojosan Mountain (353m) overlooking the town of Takeda in Wadayama, northern Hyogo prefecture.

Built during the feudal Sengoku period (1477-1568) by Mochitoyo Yamana, Takeda castle initially served as a temporary, strategically located, defense installation against the many daimyo (warlords) fighting for power at the time.

In the latter half of the 16th century, Kōchirō Hidenaga Hashiba received orders from Hideyoshi Toyotomi to invade Tajima. Making use of the existing castle, he undertook the construction of a new one. Hirohide Akamatsu, backed by Hideyoshi who had conquered the area, completed the construction of the structure of which the foundation remains still. The completed castle, a formidable fortress, covered a surface area of approximately 18700m<sup>2</sup>, extending 400m from north to south and 100m east to west.

The walls and foundation of the castle were built using natural, uncut stone and made excellent use of the mountain's geographical features. The natural terraces and variations in elevation acted as stairs and as divisions within the castle. The castle tower was constructed on the highest grounds. This unique style of architecture is called anoryu and ensures efficient use of the available space and materials.

Takeda castle's last inhabitant was Hirohide Akamatsu. Akamatsu, a friend of Seika Fujiwara (responsible for the introduction and development of modern Confucian philosophies), was granted the opportunity to study under the Korean confucianist Kanhan, a prisoner of the Battle of Keicho (1597). As a reward for his efforts in the writing of the book *Shisho Gokyo* and in the elaboration of a sutra, Akamatsu had Keicho released and organized for him to return to his homeland. This well-known and symbolic gesture is also written about in *The Chronicle of Kanyo*.

As lord of the castle, Hirohide promoted agriculture and sericulture in the area and founded the castle town of Takeda, famous for the quality of its silk products. He was respected by the people of the town and was often referred to as "a man of the people". Festivals were held celebrating the castle and the teachings of Seika Fujiwara, which have since been passed down from generation to generation.

The ruins of Takeda castle represent an important part of Japanese history and were officially listed a Japanese Historical site on September 8, 1942. It is hoped that the people of Wadayama will continue to work together in preserving this valuable historical relic for the benefit and enjoyment of our future generations.



## 【参考文献】

「考補 但馬考」「山口家文書」「和田上道氏日記」「応」記、「因幡民談記」「朝来誌」「兵庫縣神社誌」  
「太田垣・赤松両氏と但馬竹田城」「南但竹田」「竹田記念誌」「武功夜話」「信長公記」「但馬・和田山 史跡竹田城跡」  
「但馬竹田城主赤松廣通と家臣中島新右衛門連品資料の研究」「玄界灘に架けた歴史(姜在彦著)」

## あとがき

この本の編集企画にあたりましては、観光ガイドブック的な役割を果たすために文章は短く、写真、図面、イラスト、図表などを多く盛り込むとともに、いにしえの時代編を新たに挿入し改訂版として編集を行いました。

この竹田城の歴史には種々な説がありますが、今回は、地域での伝承等を参考に編集していますので、間違いがございましたら是非ご指導をいただければ幸いです。

この本を作成するにあたり、姜在彦先生、和田山町教育委員会、町史編集室、朝来郡広域行政事務組合文化財係をはじめ多くの方々に多大なご指導ご協力をいただきました。また、特に名前は記しませんが陰ながらご指導ご支援していただいた竹田の方々には心から厚くお礼申し上げます。

発行につきましては、町のご支援をいただきここに発行することができましたこと、心から厚く感謝申し上げます。

編集・発行

和国山町観光協会  
〒八六九一五二〇

発行年月日  
印刷・製本

兵庫県養父市和国山町和田山二七一  
〒六七一〇七九・六七二四〇〇三  
平成二年四月  
和国山町竹田 一七番地  
安藤印刷所

改訂

〒六七一〇七九・六七四二〇〇九  
平成二十四年四月



## 和田山町観光協会

朝来市

<http://www.city.asago.hyogo.jp>

和田山町観光協会

<http://wadayama.jp/>

